

表紙によせて

サザンカ (*Camellia sasanqua* Thunb.)

サザンカはツバキ科ツバキ属に属し、本州、四国、九州、南西諸島に分布する常緑広葉樹である。11 月から 12 月に開花し、野生種は白色で、6、7 枚の花弁の花を咲かせるが、園芸種は赤、濃桃、淡桃、白色で、咲き方も一重、半八重、八重とバラエティーに富んでいる。ツバキとは近縁であるが、花に香りを有していること、花弁が平開すること、子房に毛があること、雄蕊や花弁が基部で着合せず花弁も一枚ずつ散ってゆくことなどがツバキとは異なっている。また、ツバキより温暖な地域に分布するサザンカは、ツバキより耐寒性は劣っている。

和名のサザンカは山茶花（さんさか）からサザンカになったと言われており、学名の種形容詞も和名がもたになっている。学名の命名者は 1775 年から 1776 年に日本に滞在したツンベルクである。ツンベルクはスウェーデン出身の医者で、植物分類学の祖として有名なリンネの弟子として知られている。ちなみに、ツバキの学名の命名者はこのリンネである。

サザンカの園芸種にはサザンカ、カンツバキ、ハルザザンカの 3 系統が知られている。カンツバキは‘獅子頭’という品種およびその後代で、開花期はサザンカよりやや遅く 12 月から 2 月が開花盛期となる。花に香りはないところはツバキと同様だが、花弁が一枚ずつ散る性質を有しており、‘獅子頭’自体がサザンカとツバキの交雑種と考えられている。ハルザザンカはカンツバキよりもさらに遅く開花する系統であるが、サザンカとツバキの両方の形質を有し、サザンカに近い品種からツバキに近い品種まで様々であり、こちらもカンツバキ同様、サザンカとツバキの交雑種と考えられている。

社会園芸学科 准教授 樋口幸男